令和　６年　８月　６日

令和５年度　特別の教育課程の実施状況等について

学　校　名	管理機関名	設置者の別
気仙沼市立唐桑小学校	気仙沼市教育委員会	公立

１．学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学　校　名	特別の教育課程の編成の方針等の公表 URL
気仙沼市立唐桑小学校	http://www.kesennuma.ed.jp/karakuwa-syou/home

※必要に応じて行を追加すること。

２．学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学　校　名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
気仙沼市立唐桑小学校	http://www.kesennuma.ed.jp/karakuwa-syou/wysiwyg/file/download/1/3750	http://www.kesennuma.ed.jp/karakuwa-syou/wysiwyg/file/download/1/3751

※必要に応じて行を追加すること。

３．特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

（１）特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

・計画通り実施できている

・一部、計画通り実施できていない

・ほとんど計画通り実施できていない

（２）実施状況に関する特記事項

※（１）で「一部、計画通り実施できていない」又は「ほとんど計画通り実施できていない」を選択した場合は、必ず記載する。

（３）保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

・実施している

・実施していない

＜特記事項＞

特別の教育課程「海と生きる探究活動」を中心とする本校の海洋教育を発信する場として「リアスサミット in 唐桑」を設定し，活動を通して全学年の児童が交流し合ったり，保護者や学校支援委員会（唐桑公民館や宮城県漁業協同組合唐桑支所及び同青年部，地元の漁師経験者で結成された海友会など）から参観や講評をいただいたりすることで，本活動の価値が高まり，児童が，課題をさらに深く解決しようとする動機付けにつながっていると考える。また，昨年度は，全ての活動の終了後に，５，６年生児童と学習支援者とが意見や感想を交わす機会を設けたことで，探究内容の持続可能性や今後の方向性などについて課題を共有し，協働的な学びを一層推進する足掛かりとなった。

３．　実施の効果及び課題

（１）特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

本特例は，震災からの持続可能な復興を目指す気仙沼市が掲げる「海と生きる」を大テーマとし，唐桑地区において「海洋リテラシーfor 気仙沼」を身に付けた児童の育成を図ることによって，持続可能な気仙沼市の未来を築く気仙沼人としての「知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力の育成」「学びに向かう人間性の涵養」を目指す。そのために，本校では，これまでの地域との連携を生かし，前述の学校支援委員として協力いただいている方々を中心に，地域との一層の関わりを重視した協働的な海洋教育の支援体制づくりに努めている。このことが，全国学力・学習状況調査や標準学力テストにおける学力向上に確実につながっているという客観的な検証はまだ十分ではない。しかし，主体的に探究しようとする姿や，課題を「自分事」として捉え今の自分に出来ることを実践につなげようとする意欲・態度から，児童の物事に対する考え方，取り組む姿勢，行動など，日常生活・社会活動において重要な影響を及ぼす能力，いわゆる「非認知能力」が確実に向上してきたと考えられる。これらは，学力テストなどで数値化されない，子どもの将来や人生を豊かにする力として今後も重視したい要素であると考える。本校では，今後も，非認知能力と認知能力の一体的な向上を目指していきたい。

（２）学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

特別の教育課程を編成し，「海と生きる探究活動」を行ってきた。海と生きる探究活動を３年間行ってきた６学年児童は「まちづくり」や「唐桑の地域」に重点を置いて取り組んできた。本校の「リアスサミット in 唐桑」での発表内容やその態度を見ると，まちづくりや，唐桑町の漁業など，地域の良さについて考えを深めていることがうかがえる。また，児童の「主体的な取り組み」，「交流や体験への意欲」についてのアンケートの結果は高く，学校教育法の学校教育の目標に掲げられた，「学校内外における自然体験活動を促進し、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと」や「郷土を愛する態度」の育成につながっているものと考える。

一方，「海と生きる探究活動」の学年目標に照らすと「海と生きる」，「世界につながる」

という観点では取組の意識が十分に向いていなかったり，実践までに至る児童が多くなかったりと，改善や発展が必要だと感じている。

４．課題の改善のための取組の方向性

児童が一つの解決方法だけでなく，様々な解決方法，探究方法を活用していけるよう，校内研究を通して協働的に指導法の改善に努めるとともに，探究コーディネーターと連携したり，他教科との関連を図ったりしながら指導していく必要がある。そのことで，「海と生きる」，「世界につながる」といった視点に目を向けさせることや非認知能力と認知能力の一体的向上につなげていきたい。